

茨城の教育

茨城県高等学校教職員組合
310-0853 茨城県水戸市平須町表原1-9-3
telephone 029-305-3075
facsimile 029-305-3317
www.mito.ne.jp/~iba-kou/

2010 憲法フェスティバル開催



5月3日の憲法記念日、水戸市の千波公園はなみずき広場で《2010年憲法フェスティバル》が開催された。

沖縄の米軍普天間基地移設問題が全国的に注目されるなか、沖縄反戦地主会の仲山忠克弁護士の講演「もう基地はいらない」のほか、沖縄県人会によるエイサーの舞が披露された（写真）。

好天にめぐまれ、1000人をこえる参加者は、恒例の高校生ジャズバンド演奏など、多彩な催しものを楽しんだ。

県教委が学校図書館司書配置について通達

「12学級以上の高校には図書館司書職員配置してある」と明言

茨城県教育委員会は、4月26日、各県立学校長に対し、通達文書「学校図書館の一層の充実について」（高教第189号）を送付し、学校図書館司書と司書教諭の配置について指示した（「教育情報ネットワーク」で閲覧できる。https://nssa1.ibk.ed.jp/dana-na/auth/url_0/welcome.cgiにログイン後、左欄インデックスの「教育庁各課から」>「高校教育課」>「公文書」。文書は日付順に配列）。

通達は、まず司書教諭について、11学級以下の学校での配置が進んでいないので「今後は、11学級以下の学校であっても有資格者がいる場合、学校図書館の充実及び生徒の読書活動の活性化に資するよう、司書教諭を配置するよう考慮願います。」としている。

ついで、学校図書館司書については、「公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に

関する法律」（いわゆる定数法）に基づいて、生徒の収容定員が441人以上の学校にあっては、学校図書館担当が配置できるよう措置してあるので、司書担当者として配置をおこなうよう指示している。

さらに、今年度は「国民読書年」に当たるので、生徒の読書活動に資する取組を推進するよう指示した。

『茨城の教育』1010号（2010年3月10日、<http://www.mito.ne.jp/~iba-kou/kikanshi/1010.pdf>）で既報のとおり、茨城県教育委員会は、このところ学校図書館司書配置のための具体的取り組みを強めている。

昨年度は、5名以上の事務職員が配置されているにもかかわらず、図書館司書を専任で配置していない学校の校長に対して、個別に改善を指示した。（該当するのは次の17校＝日立第一、日立工業、磯原、太田第一、水

戸商業、勝田工業、海洋、土浦第一、土浦第二、土浦工業、石岡第一、並木、つくば工科、岩瀬、水海道第一、古河第一、岩井）

今回の通達は、さらに踏み込んで、生徒定員441名以上の高校には「定数法」にもとづき学校司書担当のために行政職職員1名を配置してあるので、しかるべく配置するよう指示したものの。441名とは生徒の実数ではなく定員であり、12学級（1学年4学級）以上の学校は全部該当する。

茨城県高等学校教職員組合は、茨城県教育庁の責任において学校図書館司書を配置するよう、一貫して要求してきた。今後は、各学校が県教育庁への配置状況報告に虚偽記載をしている件（専任で配置していないのに配置しているとウソを記載するなど）についてもきびしく点検して、専任専属の学校図書館司書の全校配置体制の早期実現をめざす。

茨城高教組 2010年度定期大会

6月5日 土曜日 （受付9:30）開会10:00—終了16:00

会 場： 水 戸 市 民 会 館 会 議 室

水戸市中央1-4-1 電話029-224-7521

必修〈道徳〉は生徒の道徳性の発達をうながすか？（第 30 回）

杉原千畝を対イスラエル接近に利用した鈴木宗男と佐藤優

「六千人の命のビザ」——杉原千畝評価におけるナショナリズムとシオニズム (15)

この欄で「六千人の命のビザ」についての検討をはじめ、間もなく 1 年になる。本県の必修〈道徳〉は、右翼国粋主義団体「日本会議」の政治的圧力を受けた茨城県知事橋本昌の肝煎りで導入されたのであるが、この「六千人の命のビザ」は茨城県教育委員会作成のテキストのなかでも最も重要な資料である。

「日本会議」は、外務大臣訓令に反してナチス・ドイツから逃れようとするユダヤ人数千人分のビザを発給した外交官杉原千畝の行為を、大日本帝国の国策に忠実に従ったものとする杜撰な議論を提出しているが、その論点について細部まで検討してきた。今年度、横浜市の数千人の中学生に与えられた「新しい歴史教科書をつくる会」の教科書において、「満州国」駐留大日本帝国陸軍によるユダヤ人利用策動と同じレベルで杉原千畝の行

為が解釈されている。この一見もっともらしい論法についても詳細に検討した。これらの議論を検討するなかで、ユダヤ人をめぐる言説においては人種主義 racism が重要な鍵になっていることが浮き彫りになった。右翼国粋主義者は人種差別主義者であるから、それも当然である。しかし人種主義についてたちいった検討をはじめると、さらに数か月分の紙面を要することになる。

そこで人種主義については、このあとマーティン・ルーサー・キングの「I Have A Dream」(教材 29) について検討する際にあらためて触れることにして、今回から杉原千畝をめぐる中心的論点にすすむことにする。すなわち、シオニズム Zionism の立場からの杉原千畝評価の問題である。まず、その露払いとしての鈴木宗男と佐藤優の出番である。

れた杉原幸子の『六千人の命のビザ』(朝日ソノラマ) を読んで外務政務次官鈴木宗男による杉原の「名誉回復」の第一歩だった。この件は、杉原千畝が帰国直後の 1947 (昭和 22) 年 6 月に外務省を免官されて以来の外務省と杉原の遺族の「和解」として報道された。

その 2 日後の 10 月 5 日、鈴木宗男は、ソ連から独立したばかりのバルト 3 国 (エストニア、ラトビア、リトアニア) との外交関係樹立のため、政府代表として現地訪問に出発した。随員として通訳をつとめたのが佐藤優である。これが鈴木と佐藤の親密な関係のはじまりであった。佐藤の説明によると、佐藤は外務省からの事務連絡電により、鈴木宗男がリトアニア側との会談の際に、杉原千畝の件とくにその退職理由について触れることのないようにせよとの指示を受けていた。また、佐藤自

身も、国家元首のリトアニア最高会議議長ランズベルギスは反ユダヤの傾向をもっているから、ユダヤ人を助けた杉原千畝の件に言及することは適当でない、と鈴木に「進言」したという。

それに対して鈴木宗男は、「ランズベルギスさんは、ソ連の共産主義体制と文字通り命を賭けて戦って、リトアニアの独立を獲得したひとだ。ほんものの政治家だ。それならば外交官生命を賭けてビザを発給した杉原さんの気持ちも理解できるよ」として、翌日の会談で杉原の件を持ち出したという。ランズベルギスはその場で、首都ビリニュス市の通りのひとつを「杉原通り」と命名することを約束した。うえ、カウナス市にある 1940 (昭和 15) 年当時の日本領事館の建物への案内を手配したという。

佐藤はこのやりとりについて、「一流の政治家が大所高所の原理で動く姿を目の当たりにし、少

し興奮した」(『国家の罫』、286 頁) と記している。しかし、鈴木は、リトアニア訪問が決定した時点で、1940 年のリトアニアでの杉原千畝の一件が使えることに思い至り、大急ぎで出発の 2 日前に遺族を外務省に招待して「和解」を演出したのだ。

「〔鈴木は〕外務官僚と多少衝突しても、杉原氏の名誉回復のために汗をかくことが、鈴木氏がイスラエルとユダヤ・ロビーの関係を強化する上で有益であるという判断をしたのだ。事実、鈴木宗男の名前は、イスラエルとユダヤ・ロビーにおいて『杉原千畝氏の名誉回復をした人物』として認知され」た。(前掲『文藝春秋』、345 頁。傍点引用者、以下同じ。)

鈴木宗男は、杉原千畝問題は対イスラエル接近のために利用価値があると判断し、まず遺族を外務省に呼び出して「和解」を演出して味方につけたうえで、ビザ発給の地であるリトアニアに赴いた。かの地でいささか強引に杉原千畝を話題にとりあげて、杉原千畝の名誉回復に尽力した政治家、という実績をつくりあげ、イスラエル政府とユダヤ人有力者らにアピールした、ということである。杉原の遺族同様、リトアニアの国家元首もまんまと利用されたことになる。

鈴木が杉原幸子の『六千人の命のビザ』(1990 年) を読んで感動し、なんとかその名誉を回復したいと思ったというのもあやしい。フジテレビが「運命を分けた 1 枚のビザ」を放映したのが 1983 (昭和 58) 年、篠輝久の『約束の国への長い旅』の出版が 1988 (昭和 63) 年で、未亡人の著書以前にも杉原千畝

の件はある程度は知られていた。鈴木は、リトアニア訪問が決定した時点で、1940 年のリトアニアでの杉原千畝の一件が使えることに思い至り、大急ぎで出発の 2 日前に遺族を外務省に招待して「和解」を演出したのだ。

イスラエルとインテリジェンス

その 8 年後の 2000 (平成 12) 年 8 月、鈴木宗男は衆議院外務委員会で質問をおこなった。ちょうど杉原千畝生誕百年にあたるので、鈴木自身が政府代表として携わったリトアニアとの国交樹立の日である 10 月 10 日までに「何がしかの位置づけをした方がいい」と持ちかけた。

これに対して、外務大臣河野洋平は、「たとえば顕彰のためのプレート掲げるとか、何か少なくとも後に残るものをいたしたい」と即座に答弁した (http://www.shugiin.go.jp/itdb_kaigiroku.nsf/html/kaigiroku/00051492000804001.htm?OpenDocument)。

そして質問で鈴木が指定したとおりの 10 月 10 日、外務省外交史料館で、杉原幸子、鈴木宗男、リトアニアとイスラエルの臨時代理大使らが臨席して杉原千畝を顕彰するプレートの除幕式がおこなわれ、外務大臣河野洋平が顕彰演説をおこなった (http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/12/ekn_1010.html)。

その後、自民党衆議院議員鈴木宗男は、2002 (平成 14) 年 6 月に斡旋収賄罪で逮捕・収監されることになるが、保釈後の 2005 (平成 17) 年に新党大地から立候補してふたたび衆議院議員となった。鈴木は、2006 (平成 18) 年に、政府に「質問主意書」を提出したが、それに対する「政

府回答」によると国家元首ランズベルギスとの会談の記録文書には、杉原千畝をめぐるやりとりの記載はなく、カウナス市長との会談記録に杉原千畝への言及があるのみだという (http://www.shugiin.go.jp/itdb_shitsumon.nsf/html/shitsumon/b164212.htm)。「大所高所」だとか「一流の政治家」などと言っているが実情は不明である。

佐藤優は、鈴木宗男と自分の逮捕は、斡旋収賄だとか背任だとかの名目をつけてはいるが、外交方針上の対立を背景とする不当な「国策捜査」だと批判している。そして、自分は「インテリジェンス」すなわち高度の国家機密に関係する職務に携わったのだと自慢げに語っている。佐藤は、イスラエルとユダヤ・ロビーにおける鈴木の高評価が「後に筆者〔佐藤〕がインテリジェンス面でイスラエルとの関係を強化する過程で役に立った」(『文藝春秋』、同) と、外交官気取りである。ところが実際には、取り調べにあたった担当検事に「外に出さない」ことになっている「特殊情報」まで喋ってしまったようである(『国家の罫』、229-31 頁)。「インテリジェンス」に携わると称する者が、検事相手に「国家機密」を解説したうえ、保釈中にそれをネタにして文筆業に精励し得意になっている。このような佐藤優の話をごまかす真に受けるべきなのだろうか？

いずれにせよ鈴木宗男は、杉原復権の手柄話を自作自演し、イスラエルとユダヤ・ロビーへの接近に利用したのである。杉原千畝を顕彰するふりをして、鈴木宗男は自分で自分を顕彰したのだ。(つづく)

§ 6
シオニズムと杉原千畝

鈴木宗男と杉原千畝

刑事訴訟の被告人として起訴され分限休職中の外務省職員佐藤優が執筆した『国家の罫』(2005 年、新潮社) に、政治家鈴木宗男は、杉原千畝の名誉回復や顕彰に尽力したことで「イスラエル、ユダヤ人社会における高い評価」をかちとった、との記述がある (284-86 頁)。のちに佐藤優はこの件について雑誌記事で詳述している(「インテリジェンス交渉術 最終回 鈴木宗男氏、その失敗の本質」、『文藝春秋』2008 年 12 月号)。

佐藤優の言うところによれば、1991 (平成 3) 年 10 月 3 日、外務省は杉原千畝の未亡人杉原幸子と長男杉原弘樹を外務省飯倉館に招いた。前年に出版さ